福島県の再造林推進を考えるシンポジウム　報告

　去る10月４日（水）福島県郡山市の「ビックパレットふくしま」において、「福島県の再造林を考える会（公益社団法人福島県森林・林業・緑化協会、福島県木材組合連合会、福島県森林組合連合会、福島県農林種苗農業協同組合、協同組合ウエル造林）」主催によるシンポジウムが開催されました。

　福島県内の森林は、東日本大震災に伴う原発事故により大きな被害を被ったことから、その再生を図るため福島森林再生事業を展開していますが、これに加えて温暖化対策として森林の若返りを図る皆伐再造林が求められていることから、その推進方策について考えるシンポジウムを開催しました。福島県の林業関係団体がまとまってこのような催しを開催するのは非常に意味のあることです。

はじめに「福島県の再造林を考える会」の佐川広興代表から再造林を推進する端緒が見え、県内全体で取り組む契機になることを期待する旨開会のあいさつがありました。

　基調講演は、物林株式会社の大貫肇氏から「これからの林業を考える～林業の産業としての発展を目指して～」と題して行われました。間伐が行われ大径材化していますが、大径材化が果たしてバラ色なのか問題提起されました。補助金に頼らない自立した林業の確立が急務であり、再造林を行う場合の林地の仕分け、林業経営経費の大部分を占める育林費、特に下刈りの省略化、伐採と造林の一体作業等、林業経営コストを低減させるための様々な方策の提案があり、低コスト再造林に取り組んでいるプロジェクトの紹介がありました。その中でコウヨウザン等早生樹の活用、コンテナ大苗を用いた伐採植栽の一体作業、疎植の植え付けがポイントである等の紹介がありました。また確保できる労働力に限界があることから、必要のない作業は止める（手を抜けということではない）ことも必要であるとの考えが示され、参加者からも質問が出るなど下刈りをいかに省力化するかに関心が高いことが示されました。

　森林総研林木育種センターの田村明氏からは、「エリートツリーの特性とその普及について」と題して、エリートツリーに対する最新の研究成果が報告された。カーボンニュートラル実現に向けエリートツリーへの期待が高いこと、福島県では関係機関が連携してエリートツリー・特定母樹の選抜が進んでいること、育種には終わりはなくさらに育種集団の世代を進め成長等の改良を行っていくことなどが報告されました。

　その後、森林総研フェローの星比呂志氏をコーディネーターに、先の両氏のほか、福島県苗組組合長の上原和直氏、福島県森連会長の田子英司氏が加わってパネルディスカッションが行われました。上原氏から県内の苗木の生産状況等について報告があり、エリートツリーについて県営採取園に加え、組合独自でミニチュア採取園を造成するなど需要に応じた生産体制を整備しつつあることが報告されました。また田子氏からは、県内人工林の令級構成から将来の木材の安定的供給が危ぶまれること、そのため特定苗のコンテナ大苗による植栽を試み見る計画があることなどが紹介されました。

会場にはスギ、ヒノキのコンテナ大苗、普通苗が展示され、300ｃｃコンテナ大苗の成長ぶりや、根元径等が確認できました。また大苗でも負担なく運搬できる電動クローラ（一輪車）が展示され、苗木運搬手段も多様化していることが示されました。

　福島県では、森林再生事業により数十ヘクタール単位で団地化され、高密度の森林作業道が整備され間伐が行われています。集約化等が大きな課題になっている中でこれらの人工林が各地に整備されているのです。そこで、これらの人工林を間伐から主伐（皆伐再造林）に誘導していくことが必要です。今回のシンポジウムはそれを考える良い機会になったと考えます。福島県の林業・木材産業のさらなる発展が期待されるところです。

（文責：福島県の再造林を考える会事務局　冨永　茂）